



## ぴくっと

---

遠くで、旦那様の怒りの声が聞こえる。私はすばやく表に出る。いらっしゃるところは、わかっている。

ウサギ小屋だ。

私は走った。旦那様の下へ。

「ぴよんこ、おお、ぴよんこ」と言って、旦那様はおいおい泣いている。

「旦那様、どうなされましたか？」

「見てわからぬか」

「はい、えーと。そうですね。ウサギが逃げております」

ウサギ小屋の中には、一匹のハエが、プーンと飛んでいるだけで、ウサギのウの字もなかった。

「ウサギだと？」

「あ、はい。ぴよんこ様がお逃げになっておりますね」

「どうしてちゃんと見ていてやらぬのだ」

「すみません。ちょっと目を離したすきに…」と言っても、始終見ていられるわけでもない。

「最後に見たのはいつだ？」

「朝、餌をやりに来た時です」

「やりきただと？」

「あ、はい。お食事をお持ちした時です」

「食事は何だったのだ」

「キャベツの芯でございます」

「キャベツの芯だと？」

「あ、はい。新キャベツの、特別おいしい部分でございます」

「そうか。なにか不満があったのではあるまいな」

「いえ、おいしそうに召し上がっておいしかったです」

「それなら、なぜ、なぜいなくなったのだ！！」

「それは、わかりかねます」

しかしそれは十分すぎるほどわかっていた。

あのウサギには、放浪癖があるのだ。

これまで、何度も、脱走しては、屋敷の色々な場所で見つかっている。

「何をしている！一刻も早く、ぴよんこを探し出すのだ！」

「は、はい！」私は、屋敷の中をくまなく探した。しかし、いつもは見つかるはずのポイント、例えば、

冷蔵庫の裏とか、洗濯かごの中とか、そんなところに、ウサギはいなかった。

すべてのポイントを探したのだが、みつからない。途方に暮れていると、右目の視界ギリギリのところ、何かがぴくっと動いた気がした。私はスッと無駄のない動きで、右に頭を回した。

けれどそこには、何もない。あるのは、熱帯魚の水槽だけである。

私は頭を元にもどそうとした。しかし、再び、何かが動いた気配がして、それはできなかった。

「何を探してるの？」突然、幼い男の子の声がした。

「坊ちゃん」

水槽の裏から、この家の坊ちゃんが出て来た。

水槽の水は昨日取り替えたばかりで、水は澄んでいた。

さっき、水槽の裏にいたでしょうか？

「いやはや、まったく気づきませんでした」

「もしかして、ウサギ？」

「はい。そうです。どうしてか、鍵をかけても逃げてしまうのですよ」

「それ、なんでか知ってる」

「どうしてなのでしょう？」

「僕が、鍵を開けてるからだよ」そう言って、坊ちゃんはあくびをした。

ははあ、そういうことだったのか。いくら脱走対策をしたところで無駄だったのだ。夜中にこっそりこの坊ちゃんが抜け出して、ウサギ小屋の戸を開けていたのだ。

「悪い、坊ちゃんですね」

「えへへー」

「どうしてそんなことをするのです？」

「ウサギを探すより先に、僕を探してみたら」

そういうなり、坊ちゃんはまた、水槽のうらに隠れた。

今度は、確実に、透明な水槽の裏に、坊ちゃんがいるのが見えた。

「そこにいるのは、分かっていますよ」私は駆け寄り、坊ちゃんを腕に抱いた。

「おお、みつけたか」大きな声が突然したので、私はぴくっと振り向いた。

旦那様が、スリッパの音を響かせながら、近寄ってきた。

「ああ、無事でよかった。ぴよんこよ」

「ぴよんこ？旦那様、こちらは、坊ちゃまですよ」

「なんだと？」

旦那様の眉が、ぴくっと動いた。

「私には息子などおらんが」

「えっ？」

私は腕の中にいる坊ちゃんを見た。

そこには、ふわふわの毛のウサギが丸まっていた。

「ぎゃっ！」

私は思わず、手を離してしまった。

ウサギがぴよんと跳ねていった。

## 【2017-05-16】指さし小説 第14話

<http://p.booklog.jp/book/114791>

今回のテーマは、「ぴくっと、びくっと」だったのですが、代表して、ぴくっとにしました。

でも、びくっとも一度登場していますよ。

ぴくっとということばを考えていたら、なぜかウサギが出て来たので、それを元にお話を作っていました。繊細な感じがするからですかね？

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114791>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト